

イギリス小説史上における

W. M. Thackeray の社会的意識について

太田藤一郎

—

十九世紀初期のイギリスの代表的な小説家である Charles Dickens や William Makepeace Thackeray のことについて、もしわれわれが何かを述べようとするときに、誰もがおしなべて、ヒューモアとか、ペイソスとか、諷刺とか、リアリズムとか、社会性とかいうような言葉を使用するにちがいないのである。なるほどこれらの言葉は彼等の創作態度や作品から抽出歸納された正しい言葉であるかもしれない。けれども創作における諷刺とか、リアリズムとか、社会性という傾向は、唯美主義的な、あるいは無批判な、のんきな人生観から生れるものではなくて、古い文化の伝統の正体をさぐりあてて、そこから新しい文化を生み出そうとするたくましい意欲や鋭い批判精神がなければならぬ。それ故にこそ諷刺的であるとか、リアリスティックであるとか、社会的であるとかという問題に触れようとするときには、その作家の思想の深さや、小説の歴史の流れにおける彼等の作品の位置や、その時代と作品との関連などを互にかみ合して考慮しながら検討していく必要があるだろうと思う。何故なら作品は作者の広く深い人生体験が思想のふりにかけられて取捨選択され、感情のうつほの中できれいにかされ、練り上げられて芸術的に表現されたものであるからである。も

の形をただ表面的に眺めてそれをうけいれようとするときには諷刺は生れない。ものの形体を形成している表面のからをはぎ去って、そのもの自身の内なる本質を正しく把握する——即ちこの批判精神が先づ諷刺への第一歩であり、それこそリアリズム精神を形成する一つの要素であるからである。ここにわれわれは作者の思想、創作態度、作品の密接な関係とか、また是等の問題と作者の属するその時代の社会情勢や小説の歴史的な性格の展開との深い必然的なつながりを無視することが出来ないことを知る。したがって Thackeray の社会的意識について考察を進めていくにあたって、彼が如何なる性格をもった小説の伝統に立って、創作活動をはじめに至ったかにふれてみることも必要であろう。

道徳的寓話が人間の肉体を罪惡の巢と考えた神中心の思想によって支配されていた中世紀の寓意文学から生れ、寓意譚の發達したものであるとするならば、非寓意的な新しい物語は中世紀の封建的社會組織崩壞の産物とみられるであろう。この新しい形式の物語は科学の發達やジャーナリズムの發生などと大きな関係をもっている。Thomas Nashe (1567~1601) や Daniel Defoe (1661?~1731) などがジャーナリストであり、短論作家であつたといふことは決して偶然なことでない。彼等は先輩たちの情熱的な道徳的黨派心からよりもむしろ、めざましい生活問題にたいする活潑な関心にもとずいて、彼等の時代の時事問題をとらえようとした。いわゆる人間の関心と称せられるものに明かな関心を抱いたのである。道徳的寓話においては、道徳、教訓が作品の主眼となり、道徳、教訓を諷刺例証するために事件、行為が設定されているのであつて、作中人物の性格はただ事件、行為の形式的主体者であるにすぎない。物語を構成する要素として三つの要素、即ち事件、性格、環境を認めるとするならば、この場合には事件的要素に重点が置かれて主となり、性格的要素はその従となつてゐる。従つてその性格は一般的な普遍的なものであつて、善人、悪人、それぞれ一般的な善惡の性質を与えられた人物が安易に配置され、そのねらいとするところは明かに勧善懲惡の意圖を押しつけようとするものであつて、この種の物語作品には個性的な特殊の性質を具えた人物は必要でない。それ故道徳的関心こそ強

イギリス小説史上における W. M. Thackeray の社会的意識について

いけれども、人間の関心はみられないのである。人間の関心は人生にたいする関心を意味しているが、これは一般性のみをえがいた道徳的関心ではなく、寓意的なものとは全く反対のものである。人間の関心の描かれた物語は、それが浅薄で際物的でない限り、人生の一部である。Nashe や Defoe をして作品を書かせたところのものが何であるかということを考えてみるならば、それは封建社会制度の頹廢によつてもたらされた社会にたいする新しい態度であり、社会と人間との関係についての関心である。彼等はブルジョア作家であり、觀念的な世界に反対の態度をとつた。彼等は自信と、樂天主義と、商業とによつて、富と、文化とを獲得したところのブルジョア階級の企業心にみたされていた。Defoe は清教徒的道徳をうけいれ、彼の道徳的善意なるものを樹立しようと努力した。けれども是等の作者は根本的に道徳にそれほど関係がなくて、むしろ人生についての好奇心に關係をもつたのである。ブルジョア道徳といつても、Nashe の時代にはまだ型にはまらない不完全な形式であつたけれども、是等の作者はブルジョア道徳をうけいれたのである。しかしブルジョア階級の道徳をうけいれながらも、彼等はその道徳にたいして最早何等の興味をも感じていないのであつた。彼等の觀察眼は男女の行為にそそがれ、彼等は人間の行為を判断したり評価したりすることにただ時間を費したというよりも、人間の行為を興味と好みとをもつて觀察したり、記録したりすることに遙かに時間をかけたのである。この種の好みから、人生の事実にたいする偏見のない好奇心から、また道德家よりもむしろ科学者の好奇心から、また感情論に墮落してない好奇心から、彼等の氣魄は生じているのである。Nashe にあつては、この感情論の要素があつたが、それでもまだ彼は封建的束縛から解放され自由にならうとする感覚をもつていた。

小説におけるこの非寓意性が、実は十五世紀スペインに發生して、フランス、イギリスに普及したところの悪党物語 (Picaresque stories)——十五世紀スペインに起つた文学形式で、古い騎士道物語の反動として、イギリスその他の諸國に盛んになった。主人公になる悪党 Pizarro は浮世の荒波をくぐつて諸國を遍歴する活動的な幾多の意図や希望をもち、人生にたいする態度をそのつど変える人物で、冒険に熱中する。かような悪党の冒険、逃亡、流転の生活を現実的

に描いた物語である。従つてこのような人物は社会の各階級を描写したり、諷刺しようとする意図をもつた作者にとつては大いに役立つたのである。) から起つたものであるといふことは偶然ではない。悪党は社会の追放者であり、封建社会とその道徳によつてはねつけられた人物である。しかしながらも悪党が封建社会の秩序からはね出されたものであるとしても、彼は封建社会の秩序によつて、特に封建社会の秩序の墮落崩壊の時代に育てられ、つくり出されたものである。悪党は零落した良家の子弟であるかもしれない。封建社会の全盛時代においてすら、封建社会は常にその正常な社会秩序の中に吸収されることの出来なかつたところの多数のかような冒険者たちを生み出してきた。貿易の発達、中央集権化された君主政治の傾向や、私有地の確立などにもなつて、彼等の数は次第に増加し、富のない者は乞食となり、諸王の兵士となつた。彼等は封建主義の瑕物であり、除物であつて、封建社会のあらゆる神聖さ——即ち騎士道、名譽、孝行、忠義、主權すらも嘲笑する。悪党物語が取扱つたのはこのような人物たちであつた。Nashe の描いた悪党物語から明かにされる性質は、乱暴、冒険、活潑、変化であり、物語はリアルに描写され、封建主義文学の精神はひそんでいない。この悪党物語の擡頭によつて従来の騎士道精神を諷刺した理想物語や道徳的寓話文学は次第に衰微せざるを得なかつた。そして過去の伝統を拒否して、社会環境の中から把握される生きた人間の生命を、人間の息吹を、人間性の価値を如実に描き得るところの新しい文学形態としての小説が待望され、それはまず Defoe によつて先鞭がつけられ、そして新興資本主義社会の成長する時代の趨勢に相応じつつ、やがて新しい庶民の文学ともいふべき小説が生れるべくして生れてきた。ここにわれわれはイギリス小説の開祖として自他ともに許している十八世紀の Samuel Richardson (1689~1761) 及び Henry Fielding (1707~54) の出現によつて、過去の因襲的な伝統の上に立つた物語に終止符が打たれつつあるのを発見するのである。Richardson は小説の目的を明かにしているが、彼の所信によると、青年男女の心を慰め、たのしませるとともに、彼等の心に道徳と宗教をやしなうために創作をしているのである。心を慰めたり、たのしませるといふ点から考察すると、小説は面白いものでなければならぬということが明示

イギリス小説史上における W. M. Thackeray の社会的意識について

されている。けれども道徳や宗教心を培うという点から考察すると、小説は宗教や道徳の重要性を伝えるとともに教訓的な意味を持つていなければならないということであって、Richardson が新しい理念をもって小説を創作しようと企図しているのにもかかわらず、中世紀の道徳的寓話の影響から完全に脱し切れないこと、即ち読者に勧善懲悪の思想を強要しようとする彼の目的が看取されるのである。人間性の価値を無視して、神の尊厳を至上としたこの勧善懲悪とか因果応報という中世紀的な因襲的な理念は、イギリス小説の中に深くひそみつづけて十九世紀の作品の中にも発見出来るのである。さらに彼は人生を正確に描写することを強調しているが、これは小説のリアリズムを明確に示したものと云ってよからう。彼に比較すると、Fielding の創作態度は更に一歩新しい文学形態としての小説の領域に肉薄していることがわかる。彼は小説において興味の要素の必要であることを認めているけれども、この要素が強すぎるといけないと警告し、さらに重要なことは、従来の物語が一部の宮廷人や貴族たちの生活のみを描写することに満足しているにあきたらず、庶民の産み出した小説にあっては一般庶民の生活が如何に下賤醜悪であろうともそれに眼を覆うことなく、赤裸々に描写しなければならぬと言っている。彼のこの態度の中にわれわれは、過去の伝統の拒否、人間的関心と人生への凝視密着、リアリズムを成就しようとする新しい性格を持った小説の確立をきびりあてることが出来る。

カリフォルニア大学の Ian Watt 教授はその *The Rise of the Novel* (1957) にきくじ

With the help of their larger perspective the historians of the novel have been able to do much more to determine the idiosyncratic features of the new form. Briefly, they have seen 'realism' as the defining characteristic which differentiates the work of the early eighteenth-century novelists from previous fiction. (p. 10)

と述べて、新しい文学形態としての小説は、Defoe, Richardson, Fielding などによって創作せられ、Richardson, Fielding は新しい小説の開祖として、旧い形式のロマンスを打破ったことを明にし、旧い物語を破壊して新しい形態と

しての小説を性格づけた重要な要素としてリアリズムを指摘している。人間の真実を描写するものとして用いられたリアリズムは、人生の低級な問題や不道徳なものを表現することにもあてられ、その結果リアリズムは理想主義の反対語となった。そして十八世紀のイギリスのリアリズムは作家たちをして、登場人物を美化したり理想化したりさせることなく、生のままの、人間の体臭の発散する人物を創造せしめているのである。即ち Moll Flanders は泥棒として、Pamela は好色家の主人に言いよられて、その苦境を切り抜けていく可憐な美しい娘として、Tom Jones は女性と放縦な関係におち入り易い欠点のある男として、彼等の有りのままの姿が描写されている。このようにリアリズムは、作家たちをして人生の現実を凝視せしめ、その中から普遍的な性格をそなえた生きた人間を抽出せしめて、すぐれた作中人物を創造せしめている。是等の人間像は各自にすばらしい個性が与えられている。金銭とか愛情の問題に現実的に苦しみ生きていく人間個人の姿である。従来物語に見られるような教訓や道徳を例証するために創造せられたような抽象的な人物ではないのである。ここにわれわれは、新しい小説を方向づけようとするリアリズム精神が、批判的であり、反伝統的であり、革新的であるということを知る。もはや十八世紀の小説家たちは過去の神話や歴史やあるいは伝説や教訓的寓意譚から自分たちの材料を得たり、作風を学ぼうとも考えなかった。彼等は彼等が所屬している社会の現実から、彼等の個人的な生活経験をとおして各自がオリジナルな材料を学びとっているのである。オリジナリティを尊重するという傾向が十八世紀の小説に有力になった。中世紀においては、このオリジナルという言葉は、始めから存在していたという意味に用いられていたが、十八世紀においては、すっかり変った意味に用いられている。

... the word could be used as a term of praise meaning 'novel or fresh in character or style.' (Tan Watt: *op. cit.*, p. 14.)

この引用文によると、作中人物が新しいタイプのものであり生命に満ちあふれた生きた一個人の創造を意味している。新しいリアリティックな作品の中で、一個の人格をもった個人として活躍するこのような人物には、当然そのすぐれ

イギリス小説史上における W. M. Thackeray の社会的意識について

た個性的な性格を与えられた個性にふさわしい名前が作者によって与えられなければならない。John Bunyan の寓意譚 *Pilgrim's Progress* にあつては、登場人物は教訓主義を諷うために設定されているので、それに応じた性質を示すところの現実ばなれのした名前、即ち罪障消滅を願つて天国を志さず巡礼者は Christian であり、世間のことをよく知つてゐる人物の名は Mr. Worldly Wiseman であり、冷酷な意地の悪い声をした疑惑城の主の名は Giant Despair であり、またこの他にも Hopeful とか Mrs. Timorous などの名前もみうけられるのであるが、このような名前は小説とよばれるところの作品の中では、実は不適當であり、不自然となつてきた。このようにいくつかの問題をとらえて、リアリズムが如何にイギリス小説の方向づけをやつてきたかということを考察してきたのであるが、リアリズムこそ小説という新しい器におさめられるべきものであり、新しい角度から社会や人間の社会生活を凝視せしめることによつて、イギリス社会のあるべき実相を当代の人達に把握させたのである。

二

封建制度の崩壊によつて中世紀の晦渋な闇の世界に啓蒙の光があてられ、ルネッサンスは人間性の高貴さ人間性の価値が再び人間社会において認識され、貴族階級の社会的政治的權威は次第に失われるとともに、庶民階級の人間としての自覚と自信は増大していった。けれども海外植民地の拡大にとまらぬ貿易の隆盛、富の蓄積は商人たちを強大にして新興資本家階級を生むに至つた。俄か成金になつた彼等は富の力に依存して、経済力を失つた貴族階級と手をにぎつて、はかない貴族性の箔を身につけようとするところをみた。空しい貴族の権位、社会的地位、金錢を後生大事に尊敬しようとしたものは、貴族階級だけではなしに中産階級に、そして下層階級の中にまでみとめられたのである。尊敬する価値なきものを尊敬しようとする俗物根性と偽善心にみち、人生の幸福は人間性の価値を尊敬する生活の中に生れるということを忘れた。こういう社会生活の弱点を小説家たちは見逃さなかつた。そして W. M. Thackeray は人生の幸福は

眞の愛情によって与えられるということを明言するに至っている。愛情（人間的尊敬、同情、独立）にたいする金錢（財産、地位、名譽、偏見）の争い、この闘争はイギリス小説が描写する闘争の一つであつて、リアリズムを樹立しようとする十八、九世紀イギリス小説を構成する重要な性格ともなつてゐる。即ち、美しい娘が貞操を堅持していることによつて財産のある男と結婚出来ると考えていた当時の中産階級の両親達のずるい処世術——娘の貞操を財産視し人間性を無視した両親の物欲心がとり上げられてゐる。Richardson の描く *Pamela* は貞操を堅持し資産家の息子の心を改心させて、最後にはその息子と結婚することによつて玉の輿に乗る。娘の両親は娘の貞操が報いられたことを神に感謝している。彼のこの作品には“*Virtue Rewarded*”という副題までついている。しかしわれわれは彼女の純潔が彼女の唯一の物質的財産、即ち安価に提供することが出来ない品物であるということと皮肉に暴露することが作者の目的であつたとは考えられない。作者の道德批判は筋道がとつていない。ブルジョア清教徒道德の厭な一面の記録にすぎない。また純潔をうばわれて自殺する *Clara* の悲劇も道学者としての作者が読者の涙をしぼるセンチメンタルな意図と、教訓的目的を讀者におしつけた感が深い。これに反して、*Fielding* の描くところの *Sophia* は、女性にたいして不身持ではあるが正義感の強い男らしい *Tom Jones* を愛するあまり、*Bliss* より強要される愛なき結婚を避けるため、莫大な財産、社会的地位をふりすてて、ひそかに父の家を脱出し *Tom* の後を追う。彼女は自己の人間性を尊重し、愛情を求めて、苦しい旅をつづけ、多くの心をいためる出来事や危機に直面するが、人間としての自由を求める自己の信念を忠実に辛棒強くつらぬき通したが故に、最後には *Tom* と手を取り合うことが出来た。作品の主脳として人間性をとりあげ、多くの種類の異つた性格を創造しながら、イギリス小説にリアリズムの新風を吹きこんだ男性的な明朗な *Fielding* の面目躍如たるものを痛感させられる。*Dickens* は十九世紀の貧民たちが生活の自由を奪われ、如何に虐待されているかということを経験した。彼のその経験は *Oliver Twist* という少年をとおして、救貧院における暴行、虐待を明かにしている。救貧法によつて設立された愛と救済の社会施設である筈の救貧院は実は暴行と虐待の世界であつ

イギリス小説史上における W. M. Thackeray の社会的意識をひいて

て、それは無力なる者にたいする当時の社会の横暴のシンボルとして Dickens にうけとられているのである。彼のこの角度からのうけとり方はリアルで正しい。そして彼は社会悪を世に訴えようとする。彼のこの態度から彼が社会改革の意思をもっていたという世評も出るのである。けれども彼には矢張りロマンティックな要素があつて、リアルな描写から生み出される緊張と迫真力は、随所で弱められてしまふという欠点を持っているのである。Emily Brontë の描く Heathcliff は Hindley の虐待暴行をうけながらも Catherine との愛情があるがためにその苦境にたえしのんでいるが、金銭に魅せられた彼女が富裕なる Edgar と結婚する意思のあるのを知りや、彼を支えていた彼女にたいする愛情は憎悪に変わり、彼を鎬地におとし入れた彼の周囲のすべての人達に復讐をしようとする。彼は自己の人間の自由を求め、この地上に生きる自由を求めてたたかおうとする。彼も Catherine もともに愛と憎しみにさいなまれる悲恋の犠牲者である。ここにもわれわれは金銭と愛情との闘いが如何に人間を醜悪にむしばむかということを知る。このように作家たちは人間社会の中に深くうがち入って、その本質を正確にうけとめて、各自の立場からその批判精神を、社会意識を表明し、彼等の作品にすぐれた力を与えていることがわかる。けれども彼等の思想の中には運命観がいまなお強く根をはっていて、そのために彼等の思考はセンチメンタルに、宿命論的になつて、人生にたいする彼等の態度も、作品の中にみとめられる力も弱められることがあるのを発見するのである。

さてそれでは Thackeray の場合はどうであらうか。ヴィクトリア朝初期の人達は意志が強固で、实际的で、忍耐強くそして果敢であつて、彼等が何をなすべきであるかということについてはよく自覚していて、それを遂行するために は全心を傾倒していた。彼等の態度はどちらともつかない中間的な状態をいとう傾向があり、強固な脇道にそれない精神を重んじようとしていたようである。ところが、Thackeray に不足していたものは、この強固な脇道にそれない精神であつたらしい。彼は気が迷つて乱れ、逡巡し、しかも気が弱かった。彼は宗教にも、道徳にも、政治にも、芸術にも関心があつたが、そのいづれにも強く取りこんでいくことが出来なかつた。学校時代の彼は勉学に打ちこむことが出

来なくて、読書に耽り雑文を書いたりして時間を空費しているのらくらした生徒であり、そのため大学も中途退学をした。絵画の修行のため大陸に渡った彼は、パリにおいて絵画の勉強をやっていた。けれどもそれも徹底しないで、帰英するや法律の研究をやっている。それからまた絵画の修行のためにパリに赴いている。宗教にたいする彼の態度についても、彼の明瞭な態度がつかめなくて、彼の友人たちはお互の意見を否定し反ばくし合っている状態である。即ち彼の宗教心を認める意見、彼には宗教心はないという意見、彼は宗教心があるように見せかけているのだという意見、彼の信心は深く、情にもろいが、抽象的理念にたいして少しも才能を持っていないという意見——みんなまちまちである。けれども彼がヴィクトリア朝時代の宗教、哲学の論争を興味をもって眺めていたということは確からしい。彼の宗教心らしいものについては、次に挙げる J. Y. T. Greig の引用文が面白いことを示している。

In so far as Thackeray had a faith at all, it was a simple one, the core of which was devotion to Jesus Christ and the doctrine of love. When he tried to express this in untheological terms, he found himself ringing the changes on three words, *fun, truth, and love*... he urged *Punch*... not to forget 'that if Fun is good, Truth is still better, and Love best of all.' (J. Y. T. Greig: *Thackeray*, Oxford Univ. Press, 1950, p. 28.)

彼にはキリストにたいする信仰も、愛の教義も、Fun, Truth, Love に変貌してうけとめられている。そしてこの三つの要素が彼の性格の一面を構成し、そしてそれが作品に反映しているのではなからうか。彼の作品には明るいふざけがあふれ、真理が重ぜられ、愛情こそ人生に幸福を与えるものであるという彼の信条が発見されるからである。

精神の不安定な初期の修業時代に、彼は物語の構成法、人物の描写法、簡明な自然な文体で描写する手法を修得し、そしてイギリス社会の特性や、社会の価値づけにたいする間違った評価や、俗物根性などを発見して、その俗物根性に同調することが出来なかったのである。また彼は最初から人間性の弱さを常に鋭敏に感じつつあったのである。彼は社

会のあらゆる階級の中に俗物を発見している。狩猟、賭博、玉突、カード遊び、飲酒、漁色に浮身をやつしている上流貴族階級や軍人の俗物、宗教心を失って形式だけを重んじている牧師の俗物、真理を探究することを忘れて、權威に盲従する学者の俗物、社会的地位をあこがれる俄か成金の商人たちの俗物、あるいはクラブ熱愛患者、大陸崇拜熱にとりつかれた俗物など、その数を挙げていくと枚挙にいとまもない程である。その中でも彼は歴史家の俗物根性にはげしい義憤を感じている。当時の歴史家が権力者に屈して歴史家としての節操をすて、まるで侍従のように王の前を平身低頭して退去して来る態度に彼はあきたらず、歴史家には、権力者の記録だけを英雄的にとりあげて記録するのでなく、庶民の生活を記録しようとする日常の姿勢、即ちリアリストの態度をとることを要求している。したがって彼は歴史家の歴史には信を置くことが出来ず、またパティペン王子が乳母車で散歩なされたといったつまらないことしか記録していない。当時の宮廷新聞や御用新聞にもあいそをつかしている。社会の実相を知るためには、諷刺的な風俗面を描いた William Hogarth (1697～1764) の諷刺画とか、社会の実相や人間性をリアルに描いた Henry Fielding の作品の方が、当時の歴史よりも遙かに役立つところの意義を持っていることを彼は悟っているのである。その結果、彼はロマンティズムや、感傷的幻想や、空想の世界に背をむけるようになり、理性と明晰の世界に生き、とるに足りない些細なことにもとりくみ、その中にも真実をくみとろうとする傾向を持ちはじめた。

Well, he is a lofty man of genius, and admires the great and heroic in life and novels, and so had better take warning and go elsewhere. (W. M. Thackeray: *Vanity Fair*, Modern Library, p. 5.)

この引用文にも明かなように、彼は人生においても小説の中でも、偉大なこととか英雄的なことを讚美する人は立派な才能のある高級人士であるから、馬鹿げた、つまらないことを労をおしまずに書いていこうとする自分の作品から手をひいて欲しいと、皮肉味たっぷりに非難するとともに、彼の創作態度をも明かにしているのである。そして Louis Cazamian の説によると、彼は生れながらにして本質的にリアリストであると断定されているのである。こうして彼の

創作態度はようやくにしてきまりつつあった。彼は Fielding の創作法に共鳴し、彼の作品に傾倒するとともに、彼の批判精神は、過去の先輩作家たちの作品の中から、イギリス小説の核心をなしている金銭と愛情との闘いという重要な問題を知り、また彼自身の周囲の現実社会そのものの中からもじかにこの問題を把握することが出来たのである。そして彼のその批判精神は彼をして金銭と愛情との闘いの場に、多数の俗物たちを発見させるに至った。

俗物精神は人間の愚かな弱点であるばかりでなく、現代人の心理の中にひそんでいる何か根本的なものであって、それは一般的な欠陥を反映した兆候であり、社会的な文化的な価値を狂わせる混乱した状態である、と Arthur Koestler (1905～) は現代文明社会の中に見られる俗物精神について述べてゐるが、Thackeray は俗物精神をば更に簡明に示している。即ちそれは尊敬すべき価値のない卑しいものを、あたかも尊敬すべき価値があるかのように尊重するところの精神であると言っている。最初に彼は俗物精神を名利を追求する世俗的精神と同じであると見ており、それからごまかしの精神、そして羽をひろげたくじやくのように見栄を張ろうとする哀れな情熱と変りがないと見ている。Thackeray は彼の初期の作品の中で、低級な人間、下劣な非紳士的な人間、下等な成り上り者を俗物として描写しているが、後には更に意味を限定して、富や社会的地位をむやみに尊敬したがる人間を俗物だときめつけるようになってゐることもあつた。そして彼はその俗物精神を支えているものとして、イギリス人の虚栄心と偽善心とを指摘している。イギリス人の虚栄心の対象は権威であり、社会的地位であり、名誉であり、教養人ぶることであり、金銭の追求であつた。彼の考えによると、中産階級のイギリス人に比較して、フランス人の方がはるかに芸術を尊敬し、はるかに立派な趣味をもつてゐるということ、そしてフランス人は、訳もわからずに何でも非難しながら大陸を横行するところの野蛮な無知なわがままなごころつきである教養のない俗物イギリス人を嫌悪するだけの充分な理性をもつてゐた、ということを彼はみとめてゐる。それでは人間が俗物精神にとりつかれずにすむには如何なる生活態度をもてばよいのかという問題になると、彼は分に相応した生活をやることを主張してゐるようである。何人といえども実際以上に金持であるように、また実際

以上に立派な生れであるかのように振舞ってはならないし、また實際以下に貧乏であるように、また實際以下に下賤な生れであるかのようにも振舞ってはならないという意味である。即ちこれは俗物精神を超越した生活態度であつて、彼が歴史家たちに要望したところのはかない英雄的なヒロイズムやセンチメンタリズムではなくて、日常の姿勢 (natural posture) をとるという意見に相通じてゐる。この日常の姿勢をとるためには、社会生活において何が眞実であり、何が価値のあることであるかを観察し、理解するだけの社会意識や批判精神、即ちフランス人にみとめられる充分な理性をそなえていなければならない。リアリズムを成就しようとする作者は、この社会意識、批判精神、即ち冷静な理知をおして社会の正体を解剖して、その内部にひそむ社会の不正や人間の愚行を把握し、その結果激しい義憤にかられる。そして彼等は彼等のこの義憤によつて社会の不正や人間の愚行を否定しようという強い衝動にかられ、その悪なる状態を機智と笑いによつて攻撃しようとする。ここに諷刺が生れる。憤激嘲笑の結果生れる諷刺は攻撃し、傷け、そして矯正する文学である。諷刺は機智の文学である。機智は理智的であつて、人間の理性にうったえようとする。諷刺は冷静な精神からつくられたものであり、その意味において諷刺家は批評家に最も近い存在である。諷刺の持つ要素と殆んど同じような要素を持ち、諷刺の現わす効果と殆んど同じような効果をもつてゐる表現形式として、ヒューモア (humour)、もじり詩文 (parody)、比喩 (allegory)、落首 (lampoon)、アイロニー (irony) とかいったものがあるが、ヒューモアは情緒的で、寛大な機智と笑いによつて人間の感情を刺戟し、和解させる文学である。ヒューモア、機智、諷刺について Edgar Johnson は彼の著書 *A Treasury of Satire* の中で

Wit, then, is a true instrument of satire, but humour only a bait and lure. Humour entices us into the satirist's net, perhaps; ... Humour is like the cookies and candies on the gingerbread hut ... And when the satirist gets us in his clutches, he will plump up our vanities, pretences, absurdities, and falsehoods to serve back to us at the feast of reason. That is the function of wit in satire. (*A Treasury of Satire*. Simon

and Schuster, New York, 1945, p. 33.)

と面白くことを述べている。諷刺の表現手段として用いられ、人生を批判する機能を持ったアイロニーは、諷刺のようには激しい攻撃態度をとらない。すこぶる慎重で抜目がない。けれども非社会性ではない。客観にたいする正しい批判性をもち、アイロニーが個人を対象とするならば、諷刺は社会を対象とする。Gilbert Cannanが、

In Greece... satire might never be directed against the community, but no person, no god even, was held immune... In England, on the other hand, as Swift discovered, persons are held sacred, while upon the nation and its character abuse may be poured... (*Satire*, Martin Secker, London, pp. 13~14.)

と述べているが、イギリスにおいてはアイロニーよりも諷刺が栄えたことがわかる。Edgar Johnson は、

Irony is one of the most powerful devices of indirect satire. It is a kind of dissimulation, and the ironist a dissimbler. (Edgar Johnson: *op. cit.*, p. 24.)

と言っているが、アイロニーは普通、あてこすり、あるいは、いやみ、ひやかしの形態をとる。諷刺にも強弱があつて、Jonathan Swift (1667~1745) のように冷徹な骨肉を刺しつらぬく諷刺精神、Fielding の作品にみるような明朗なと笑いをともなつた諷刺、あるいは Thackeray のように軽快で温情のあふれた諷刺、そのあらわれかたは多様である。Thackeray は人間の虚栄心や偽善心を打叩くのに必要なものは諷刺であるとして、彼の時代の社会や、俗物や、俗物根性を、批判的にそしてリアルに観察把握し、そしてそれらのものの中にみとめられる不正や悪行を軽快洒脱に嘲笑しようとしたのである。当時の社会、特に下層貧民階級の醜悪なるあわれな生活をばくろし、無力なる彼等の上に加えられる暴行と虐待の世界に義憤を感じて、これをえがこうとした Dickens, そして彼とは反対に、中流、上流階級の世界にみられる不正、俗物根性、金銭と愛情との闘いを洒脱に諷刺しようとした Thackeray, 彼等を社会批評家として、社会改革家として支えているものは、現実生活にたいするリアルな批判的な彼等の社会意識にはかならない。

イギリス小説史上におちる W. M. Thackeray の社会的意識について

Dickens の空想力は、彼の心眼にうつる社会の中から、グロテスクな喜劇を、グロテスクな恐怖をとらえてうつそうとしている。Thackeray の空想力は、社会の全景をとらえ、社会の全景をうつそうとするあたかも万華鏡のようなものである。そして彼は現実社会をば虚栄心や偽善心かられた俗物たちが、日夜あくせくと、地位、名譽、富を追求しながらうごめき、道化芝居を演じている虚栄の市 (Vanity Fair) であると観じている。そして彼の作品は家庭の歴史とか人物の生涯とか、史実に材料を求めたロマンスとか、人間生活のパノラマとかを描いているが、そのいずれにも虚栄の市が取りあげられている。Pendennis (1848~50) は彼の自叙伝的な要素が多分に導入されている作品であると言われているが、たしかに彼の面影を作中の主人公に発見することが出来る。生活経験のない未熟な Pendennis は彼の財産をねらっていた年上の舞台女優 Miss Fotheringay に激しく惹かれて情熱の焰に身をやきつくすが、愛なき彼女に裏切られ、失意の彼は、ロンドンに連れ去られて学校に入った。彼は勉強に身がはいらず遊興の果て試験に失敗し、就学を放棄して多額の借金を負い故郷に帰ってくる放蕩息子であった。彼は文学に関心を持った富裕な家庭の美しい娘 Miss Amory Blanche と戯れの恋に興じたが、再びロンドンに出て法律の勉強をはじめ、徐々に生活経験を積み重ねるにつれて、彼の心の中には理性がめざめ、合理的な精神を持ちはじめた。そして門番の娘 Miss Fanny Bolton と愛し合うが、偏狭な母性愛と虚栄心を持った彼の母の反対で実を結ばない。彼は最後に彼を愛情と好意とで支えつつけてきた Miss Laura Bell と結婚する。彼の生活はまことにあやまちの多い、欠点のある生き方である。彼はいささかも英雄的な性格を与えられていない、即ち現実の社会のどこにでも見受けられるような平凡な普通の一青年にすぎない。そういう性格をもった人物が作品の主人公として創造され、そして彼の生活態度や性格の変化発展が追求されていく。その舞台は虚栄の市なのである。ここにわれわれはこの作品の中に作者のリアリズムを発見する。そして Fielding の創造した Tom Jones の再来を感じる。Henry Esmond (1852) は歴史小説であると言われているが、この作品では虚栄心の権化ともいうべき女性、しかも自己の立場をよく理解し、自己の意思を積極的に表現出来るところの、因襲的モ

ラルにしばらく新しいタイプとしての一女性が創造されている。その名は絶世の美女 Beatrix である。彼女は幼ない時から地位、名譽、富をあこがれる虚栄心を持っていたが、長ずるにつれてその傾向は益々激しくなり、とまり木にとまって顔をつき合してくうくうと鳴き合っている鳩のような生活は御免だと言ひ、社交界の女王になりたひとか、女性が奴隸のように男性に隷屬化することは正しいことではないと主張する。また彼女は自由にとびまわることの出来るところの翼がほしいと叫んでいるのである。男性の横暴さについて、作者は Esmond の口をかりて、男というものは自分で花瓶を投げつけて粉々にこわしてしまつて、それがこわれていると言つて後はそれを顧りみようともしない。一体誰がそれを管理して、誰がそれをこわしたというのか、と言つて男性の横暴さと女性の地位の弱さ低さについて憤慨しているが、これは打ちわられた花瓶という形をかりて作者が男性の横暴さを諷刺していることが明かである。こゝういう見解を抱いていた作者によつて創造せられた Beatrix は男性に隷屬することを拒否し、自由の翼を求めめる女性として形象化されたのである。従つて彼女は、男性の奴隸に甘んじることゝを婦徳と考へている因襲的な保守的な彼女の母親 Rachel とは意見が合わないし、社会的地位も富もない Henry Esmond の求愛を拒否してしまふ。そして彼女には十何度という縁談があつたけれども、そのいづれも彼女の氣に入っていない。しかし遂に Hamilton 公爵との婚約がととのひ、彼女の虚栄心を満足させるかに見えたけれども、運命の神のいたずらか、彼女の父を殺して彼女の母を未亡人にさせた悪貴族 Mohun との決闘によつて、彼を殺したが、彼の介添人によつて、彼女の未來の夫である公爵も殺されて、彼女も未婚の未亡人となり、長年抱きつづけてきた虚栄心の夢ははかなく破れてしまふ。この時になつて彼女は Esmond の眞実の愛をうけ入れたいと思ふのであるが、既に彼は彼女の母の愛情を求めていた。彼女の母は娘を世俗的な女性だと言ふ。この世俗的な現世的なタイプ、即ち世俗性、現世性に重大な意味がある。この作品においては、男性の横暴を怒り、女性の奴隸的地位に反撥して、男性との対等の地位を積極的に求め、束縛されないで自由に生きようとした新しいタイプの性格として創造せられた Beatrix というすぐれた人物をおして、因襲的なモラルを

鋭く批判しようとする作者の社会意識が発見される。彼の傑作である *Vanity Fair* (1847~48) においても、二つの異った性格、即ち金銭を追求する人物と愛情にすがりついて生きていこうとする人物とが対照的に描写されている。この作品は 'Before the curtain' において、人生というものは虚栄の市であるということ、そこには掛小屋がかげられ、伊達者は女に色目をつかいながら肩で風を切って歩き、看板にみとれる田舎者の懐中物をうかがうすりか横行し、巡査がそれを捕えようとしており、芝居小屋では道化師が生活の悲しみを押しかくしてとんぼ返りをして客を笑わせている、それはまことにうら悲しい場所である、と述べながら、作者は彼の人生観を咏歎的に明かにし、虚栄の市ともいべき社会の姿をこの作品で描写しようとする彼の意図を示している。そして人生の道化芝居を演じようとする人形として Amelia Sedley, Becky Sharp, George Osborne, Rawdon Crawley, William Dobbin たちの出演者が紹介される。第一章において Amelia と Becky との性格が直接、間接の巧みな表現法によって端的に示され、全く興味のある重要な部分となっている。Amelia はロンドンの富裕なる株式取引人の娘であり、温和な、情愛の深い、保守的な娘で、悪く言えば、もどかしい、少したりないと感じさせる娘で、George を愛している。それに反して Becky は貧乏画家と舞台女優との間に生れた娘であるが、両親に死別してこの広い世界にたよるべき何者をもたない。自分で自分の生活を考えていかなければならない、勝気な、權威や形式主義を軽蔑する利口な娘である。彼女は生活も縁談も考えてくれる両親を持たない。それ故、彼女は自ら積極的に意識的に女性であることを利用して、生活の道を確保しようとする。彼女の最初の槍玉にあがったのは Amelia の兄でインド帰りの金持で伊達者の肥大漢 Joseph であるが、いま一と押しで彼を口説きおとすというところで失敗する。彼女の第二の的になったのは准男爵の次男 Rawdon であった。彼は賭博と飲酒にふける愚鈍な軍人であるが、彼の叔母に寵愛され、叔母の財産は彼に与えられるであろうと取沙汰されていた。Becky は将来彼のものになるであろうその財産を目当にして彼と結婚した。けれども彼の叔母は彼等の結婚には不服で、そのため予期された財産は彼に与えられず、彼女の期待は外れてしまった。しかし彼女の目的はくじけなかつ

た。彼女は夫にたいする愛情も、子供にたいする母性愛も感じないで、ひたすら社交界に出ようと画策しつづけるのであるが、それも失敗して最後には夫とも別れて大陸を放浪する運命となる。彼女とは反対に Amelia は男の愛情に支えられなければ生きていくことの出来ない消極的な保守的なタイプの女性であって、彼女には男の心を見抜くだけの知性がない。彼女の父は株界の暴落で破産し、一朝にして乞食娘になる。George は貧乏になった彼女と結婚する気持が次第にさめはててしまふが、彼女の失意の姿を哀れと思つた William Dobbin は、二人を説きふせて結婚させてしまふ。彼女は夫を愛しつづけるが、女遊びの好きな軍人である彼には、妻にたいする真実の愛情を持たないで、Becky に恋文を送つたりする。しかし彼が戦死したのも、Amelia は夫の不実を知らないため、夫の愛情を信じ、二人の間に生れた遺児を育てながら十五年間の未亡人生活にあたら青春を空費する。彼女の生活は貧窮を極めるが、その間彼女を精神的にも経済的にも援助しつづけたのは、心秘かに彼女を愛しつづけてきた善意の軍人 William Dobbin であつた。Becky から夫の不実を知らされた Amelia は、William の不変の真実と限りない愛情にこたえ、二人は結婚して幸福な生活にはいるのである。この二人の女性の結婚形態を観察すると、Becky のそれは富や社会的地位を目的にした結婚であり、Amelia のそれは愛情に生きようとする結婚である。そしてこの二つの立場を異にした結婚生活が、作者の対照描写の手法によつて読者に示される。一方が社会の上層に浮び上っている時には、他方が社会の低流に沈んでおり、一方が上層から低流に沈んでいくと、他方が低流から上層に浮び上っていくというように、絶えず対照をなしている。たとえばこの作品の最初において、Becky は社会の下層に沈んでいたが、物語の途中では浮び上り、結末では再び沈んでしまふが、Amelia の場合はこれと全く対照的な曲線を描いて彼女の浮沈が示されている。この作品の副題は 'A novel without a hero' とつけられている。この 'hero' という言葉を作中に登場する人物のうちの主役を果す人物と解釈するならば、この作品にはそのような人物は発見出来ない。登場人物はそれぞれ力量をわけ持っている群像であつて、これらの群像によつてこの作品の人物構成が巧みになされ、作者は彼等の社会生活を、社会の全景をパノラマの

イギリス小説史上におよぶ W. M. Thackeray の社会的意識について

ようにうつし出そうとしている。そこにわれわれは作者のリアリスティックな精神を発見する。この群像の中でも比較的確で強い性格を持った人物は Becky であろう。彼女は利口な手管女としての典型的な性格があたりえられ、英文学史上においてもすぐれた性格をもった人物の一人として創造せられている。彼女の性格が悪であるか、否か、ということについては諸説があるけれども、彼女が Miss Pinkerton の形式主義崇拜の俗物根性を見抜き、これを軽蔑し、反抗した態度とか、社交界の上流婦人 Lady Barchers のような根性をたたきつぶした態度より判断すると、彼女には俗物の素質を見通す能力、批判力、俗物をやつつける力量があったということ、そしてこういう彼女を通して他の俗物をやっつけている作者が彼女をよしとしている点などから考えると、彼女の性格を悪とはきめつけかねるものがあり、また孤立無援の彼女が生きたためには金銭を追求し、手管を弄しなければならなかったのだということを考慮するならば、われわれは彼女を憎むことは出来ないのである。むしろこのような立場の彼女に同情をよせざるを得ないのである。またこの 'hero' という言葉を英雄的な性格をもった主人公が出ない小説であるというように解釈するならば、作中の人物たちはそれぞれ、イギリス小説の核心であるところの金銭を追求する俗物か、愛情にすがりついて生きようとする人物かに選別され、彼等は現実社会にみうける人達と全く同類の、欠点や癖を持っている平凡な普通の市井人たちなのである。戦争に出征する夫の身を少しも気遣わない平然たる Becky、夫に愛情を持っていない彼女には、夫の戦功によって下賜される年金の方に魅力があり、夫を愛している Amelia にとっては、戦争によって夫を奪われることは死にまさる痛ましい心配であった。このように人間の生活から幸福を奪い去る戦争について、Thackeray は戦争の実体を明かにしている。即ち戦争とは、一部の将官たちが国民からその存在を忘れられるようになると、彼等の名譽を恢復するために他国と事をかまえて戦争を起し、関係のない国民の多くの尊い血潮がそのために犠牲にされるものであって、戦争とは一部の少数者の名譽恢復のために行われる大賭博であると、彼は痛烈に批判しているのである。この当時 Thackeray はど明瞭に大たんに戦争の実態を批判した作者は、果して誰があったらうか。われわれは彼の勇氣のあ

る社会意識をうけとめることが出来るのである。

三

これまで Thackeray の情景描写、人物描写を検討してきたのであるが、David Cecil が彼の作家論の中で、次のように述べている。

His actual method of describing scene and character is, to steal a phrase from the art critics, a "stylised" method. Unlike Dickens his achievement lies in its truth to recognisable reality, but like Dickens he is not a realist. He does not attempt to reproduce with a photographic accuracy all the facts, important and unimportant, that make up the surface of any scene—like Zola, say. (David Cecil: *Early Victorian Novelists*, London, Constable & Co., 1934, p. 86.)

成程 Thackeray の手法は、ある一定の様式をもっている。彼の作品には対照描写の手法が、事件にも人物にも使用されている。登場人物はそれぞれの作品の中で名前と衣裳とが交えられていて、与えられている性格は殆ど同じ枠の中に固定されているのを発見する。しかし Thackeray がリアリストでないという意見については更に考察を進めなければならぬ段階に到達した。彼がリアリストでないという David Cecil の見解によると、情景の表面を構成しているすべての物を、たとえそれが重要なものであろうと、つまらないものであろうとも、そのすべての物をまるで Emile Zola (1840～1902) のように写真的な正確さをもって、再現しようとはしていない、という論拠である。この理由から Thackeray がリアリストでないというのであればいさなか異論がある。ものの表面を観察して、それを写真的な正確さで再現することだけがリアリズムであるとは思えない。われわれの感覚に明瞭にとらえられる対象を素直に再現すること、即ち目に見える外的事実を正確にありのままに表現することは、もちろん素朴な形におけるリアリズムである。

けれども目に見えていることが現実ではないことがある。その現実的対象の本当のものは、何かの理由でその奥深い内部に隠れていることがある。したがって、その中にひそんでいる真実を発見してこれを明かにする、即ち現実をさぐり当てて、現実の生活を広く、多面的に、正しく描写しなければならぬ。外面的なりアリステックな作風は、一定の社会と時代の外部的特徴を表現しようとするものであるが、それよりも更に深い歴史的なりアリズムは、表面よりもさらに深く浸透している本質、現実的歴史的内容、即ち人生の種々相を深く開示することである。現実的歴史的内容の深い開示にあたって、典型性ということが考慮されなければならない。典型的情勢における典型的性格の正しい伝達ということである。あるものの部分的真からはそのもの全体の正しい姿を伝達出来ない。ということは、たとえばあるものの部分的真を発見しても、それでそのもの全体を正しく発見したということにはならないからである。部分的真ではなく、いくつかの部分的真の総合から得られる全体の真を伝達することによって、リアリズムは達成されるのである。こういう過程にあつては作者の思想の光をおして、何が虚偽であり、何が真実であるかを明かにする必要もあるだろうし、またそこには作者のリアリスト的素質があつて、彼の思想、批判精神、理性によって分析と取捨選択が行われて、はじめてその物を支え、維持している真なる生命体を抽出することが出来るのである。一個人の性格を把握するにしても、単に外的な様子だけを見て、その表面の姿かたちを写真的な正確さでうつしても、その人間の全体的な性格は表現することが出来ないのである。カメラのうつし出す世界とリアリズムが創造する世界には明かな相違がある。小説家の仕事は現実社会における彼の経験を新しい形態に直し変えて、それを小説の形態に形象化することである。従つてカメラはこの機能を果たすことが出来ない、というのは新しい形態に直し変えるためには、作者の充分な理解と正しい思想と深い感情が必要であり、作者の批判精神によって分析と組立とが、即ち内部改革が行われなければならないからである。それ故、David Cecil はおそらく十九世紀末の自然主義小説家である Zola が言っているような、部分的真実を描写しようとする自然主義の立場から、Thackeray をリアリストではないと批判したのではないだろうかと思われる。

のである。David Cecil の見解とは違った角度から、われわれはリアリストとしての一面を Thackeray に発見することが出来る。しかし彼をリアリストであると認めても、別の問題はたしかに残される、即ち彼のリアリズムは完全に徹底したものではなくて、彼には彼のリアリズムを弱めるような他の何物かがあるということに気付くのである。

彼によって創造されたすぐれた人物 Becky Sharp に、彼のリアリズム精神の結実をたしかに看取出来る。愛情の尊さを無視して、社会的地位、富を追求する手段として女性という性意識を自ら積極的に利用し、男の世界をかきまわした彼女は、彼の時代の凡ての生活意識の典型的な凝縮であると考えられるのであるが、それと同時に彼女をおして、彼女の周辺の者たちがこの種の生活意識をもっていたということ、そして彼女はそういうものを見抜く能力をもっていたということを作者は示している。ウィクトリア朝時代の人々は、貴族崇拜、財貨崇拜の俗物精神にかられ、その結果愛情、結婚をば不純なものにみなし、欲得づくのものにして、愛情や結婚をばただ財産を手に入れる手段にしかみなかっていたのである。俗物軍人 Major Arthur Pendennis をして、結婚の重大要素はお互に役立つこと、即ち女性に財産を保持し、男性がそれを利用して社会的地位を獲得するということに同意することである、と信じさせているが、これは作者が当時の結婚にたいする金銭づくの不純な考えを暴露したものである。当時の社会内部にひそんだこのような特異性を、また人間の尊厳、人間の価値を放棄した人々のその内的性格を、彼は Becky や他の人物たちの生活をとおして批判的にとりあげようとした。性的放縦にたいして義憤を感じていた彼の批判精神からみるならば、こういう社会は明かに不完全な社会であり、それ故、彼は *The Book of Snobs* とか、*Vanity Fair* などの作品を媒介にして、社会のその不完全な姿を描写して読者の注意を惹こうとしたのである。この点において、われわれは彼をリアリストであり、社会的意識をもった作者たちの一人とみなすことが出来るであろう。社会意識をもっていたといっても、彼の社会意識はそんなに過激なものではなくて、人々が彼等自身の社会生活を規制されてきた、新しい文化理念の流を止めようとする因襲化した、また固定化したモラルの根本を掘り下げて、その正体を暴露しようとする程度のものである。一八五一年三月

イギリス小説史上における W. M. Thackeray の社会的意識について

二十六日附の母への手紙で、彼は次のようなことを書いてある。現在とらわれている政治は社会の動きからずれていて、人々の知性を高めるようなものではないこと、大きな革命がやがて起るだろうということ、作者たちは社会の古い構成組織をただ本能的にくずそうとしていること、ヒューモラスな面白いやりかたでこういう古いモラル、古い社会組織を皮肉り、嘲笑することは、彼にとつては愉しいことである、というようなことを書き送っている。下層階級の出身者であり、心のあたたかい、香気な、楽道家、Dickens は社会の見方が表面的であるけれども、人々を充分に笑わせ泣かせた。Thackeray は人間社会を虚榮の市——非常に騒がしいけれども、確かに道徳的な場所でも愉快な場所でもない——と覷じ、社会の悪徳、不正や俗物をたんに表面的に取扱うとするのではなくて、それらのもの、また凡ての社会的慣習を内部から掘りくずしてその正体を明かにしようとしたのである。ここに彼の諷刺家としての批判精神を見出すことが出来るが、俗物根性をあばかれた人達は不愉快になり、彼等は Thackeray が冷笑しているときめつけた。勿論彼は冷笑し、そしてひき下ったのである。彼にはともかく一応の社会意識はみとめられるけれども、理路整然たる完全な社会理論を持っていなかったもので、それで彼の活動は徹底的にくいさがあって、ものの深部をさぐるところまではいけなくて、軽快に皮肉り、冷笑し、そしてひき下るほかなかつた。こういう事情で、社会意識をもつていながら、彼は憶病にそして彼の信念もぐらつかざるを得なかつたのである。彼の物柔かい目的は、この虚榮の市とも言うべき人間社会を、社会の人達と一緒に歩いてみることであり、彼等が散歩から帰ってただ一人きりになったとき、全くみじめな思いにかられるにちがいないということを彼は忠告している。彼の憶病を、不安定を Vainety Fair の終局におつて、

' Ah! Vanias Vanitatum! Which of us is happy in this world? Which of us has his desire? or, having it, is satisfied?—Come, children, let us shut up the box and the puppets, for our play is played out.'

と、咏歎的な言葉をもらし、人生の空しき無常さをこの時代の人達に訴えている。彼はどちらかといえば社会解説者、

あるいは素人の説教者にもなりたかったのであろうが、こういう運命的な考えは、彼のリアリズムを、社会意識を規定するものであり、これは明かに人間の価値、人間の能力の限界を一步後退して過小に認めた彼の敗北主義を示すものである。彼の運命観は彼の他の作品の随所に発見されるのであって、人生は空しいというこの運命観が、実は諷刺家である彼の一面を構成して、そのために彼のリアリズムは徹底的なものになつていないということ、そしてまた作家としての彼の態度がどちらともつかない不安定なものであって、そのために社会意識をもちながらも、社会組織の内部にまっしぐらに深まり入ることの出来ない、彼の浅い社会的意識の原因をさぐりあてることが出来る。

社会の悪徳、愚行を鼻もちならないものに考え、それを皮肉り嘲笑した彼を支えていたものは、おだやかな諷刺であり、ヒューモアであった。J. Y. T. Greig が彼の Thackeray 論の中で、

To him, humour meant 'love plus wit' with the emphasis upon the first. 'The humorous writer professes to awaken and direct your love, your pity, your kindness—your scorn for untruth, pretention, impotence—your tenderness for the weak, the poor, the oppressed, the unhappy.... He takes upon himself to be the week-day preacher.' (J. Y. T. Greig: *op. cit.*, p. 134.)

と述べているが、Thackeray のヒューモアは、愛情と機智との結合したものであるけれども、愛情の方が強いということを描描している。愛情、同情、親切心を喚起させ、虚偽、見せかけ、ぺてんを軽蔑し、弱き者、貧しき者、しいたげられている者、不幸な者にたいしてやさしい心をもつ——これは Thackeray にあっては、悪徳、愚行を冷酷にやつつけようとするきびしき、冷たさよりも、むしろ温情がはるかに優位を占めていたことを示すものである。あたたかい愛情の人であつたればこそ、たとえ虚偽、見せかけ、ぺてんをにくんでも、それらにたいする彼の義憤は、温情味のある軽快な諷刺としてしか現わされなかった。彼の豊かな温い愛情は、虚栄心かられておのが道を思うままに歩いてゐた Becky Sharp を、また Beatrix をも不幸な末路からある程度救い出している。ここにおいて、表面よりもさらに

深く浸透している本質、即ち現実的歴史的内容を深く正しく開示しようとする彼のリアリズムを弱めたものの正体は、また彼の社会的意識を徹底的に深めないで、浅いものにさせたところの彼のセンチメンタルな要素の正体は、この充分すぎる程の彼の愛情であり、彼の運命観であったとすることを知るのである。そして彼の作品には、センチメンタルな要素と、諷刺的な要素とが、融合一致していないで、交互に表出されている。センチメンタルな要素が表出されているときには、諷刺的な要素は不思議に姿を消してしまうのである。この現象は、彼の豊かな愛情のために、諷刺精神が征服されてしまうのであろう。またこの二つの要素がばらばらであったということは、彼の態度の憶病、不安定と相關的な関係があるのではなからうか。

イギリスの中流階級の富裕なる叔母の家で育った Thackeray は、自ら共和主義者であると称し、そして反貴族主義的な見解を表明し、社会には貴族崇拜、拜金根性がみられるが故に、社会をば彼がたとえ嘲笑したとしても、彼は生れながらの紳士であり、彼の素性を取消すことが出来ないで、彼の心は安定しなかった。幼くして母に生別して孤獨の生活を送らなければならなかった彼は、愛情に飢え、少年 Henry Esmond のように彼はひとり物思いにせず憂愁居士であったにちがいない。こういう不確実、不安定な感じの中に俗物根性というものが芽生えるものなのである。Beatrice の愛情をかくとくするための手段として、Esmond は牧師になることを断念して、軍籍に身を投じた政治的事件にも關係して社会的地位を求めようとする俗物に一時はなりはてしているが、Greig の意見によれば、Thackeray は彼自身俗物であったが故に、俗物が彼の目についたのであり、彼自身の性格の中には卑屈な根性がひそんでいたがために、他人の卑屈な根性をどうすれば暴露出来るかということを知っていたのではあるまいかと想像されているが、彼が、Pendennis 少佐のような俗物であったか、どうかについては両論があつて、彼の親友でさへ確答が出来なかつた。作品中でも、また彼の實際社会での行動においても、この点については彼ははっきりしていなかつた。それはともかくとして、彼は人間性についての哲学を組織的に読者に与えようとして努力したけれども、人生批評のために小説を用いよう

とした安定した目的をもった Henry Fielding には及ばなかったと言われている。Thackeray が幼いときからの人生経験——求めうべくして求められなかった母への愛情、彼の妻の癡狂による家庭生活のわびしさ——によって、空の空なるかな、すべて空なり (Vanity of vanities, all is vanity) という人生を運命的に空しいと観ずる人生観を持たざるを得なかったが故に、彼の人生批評にたいする組織的な力も、安定性を欠いた気分の弱いものになったのではあるまいか。彼が青年になったとき、義父とともにインドから帰英した母と再会し、彼は激しく母の愛を求めて、何事にも母にたよりすぎる傾向が強くなった。彼は当時の社会の人々の意見に制せられて、自分の筆をやらわらげているが、彼には人気がか金銭とか世論に同調しようとする、俗物精神が幾分あつた上に、この母と子との愛情の欠如、追求というものが、彼をしてセンチメンタルな描写をさせるに至っている。センチメンタルを嘲笑しながら、彼自身がセンチメンタルに陥っているという矛盾が見受けられる。現代の読者が、センチメンタルな彼の立場よりは、諷刺的な、悪党を看破する、ぺてん師をやっつける彼に関心を抱いているに反して、彼の時代の読者は、俗物にたいする彼の洒脱な諷刺を好むと同時に、軟かな涙もろい、宗教的な人生観をもった彼にたいしても、関心を抱いていたのであろう。軟かな、涙もろさ——社会の人々の悪徳、愚行にたいしても、その正体が悪であるということを意識しながらも、彼の温情はそれを冷笑嘲罵し去らないで、からかいと、ひやかしとで、その愚行をやわらげようとする。そこにわれわれは、キリスト教によって彼の心の根底につくり上げられた彼の紳士としての人格、彼の深い同情心が、あたかもきかい油のように作用して、激しくなろうとする諷刺精神をおさえ、まかしているのを見る。したがって、Becky Sharp の描写にしても、彼の手心が加えられていることを発見する。彼のこの強い同情心のために、彼の社会意識、批判精神は弱められ、彼の態度はあいまいとなり、意志薄弱となつて、彼の人生批評も結局 *Vanitas vanitatum* (Vanity of vanities) に落着かざるをえないのである。

参考文献

- Allen, Walter: *The English Novel*
Cannan, Gilbert: *Satire*
Cazamian, Louis: *A History of English Literature*
Cecil, David: *Early Victorian Novelists*
Craig, Hardin: *A History of English Literature*
Fuess, Claude M.: *Lord Byron as a Satirist in Verse*
Greig, J. Y. T.: *Thackeray*
Johnson, Edgar: *A Treasury of Satire*
Kettle, Arnold: *An Introduction to the English Novel*
Koestler, Arthur: *An Essay on Snobbery*
Neill, S. D.: *A Short History of the English Novel*
Routh, H. V.: *Money, Morals and Manners as Revealed in Modern Literature*
Tillotson, Geoffrey: *Thackeray, the Novelist*
Walker, Hugh: *The English Satire and Satirists*
Wolfe, Humbert: *Notes on English Verse Satire*